

市民の横顔

次作の出版を目指して

日々執筆



小説家
泉 志郎さん



▲泉さんの著書は図書館で貸出中

行政書士をしながら、70歳で初めて小説を出版し、昭和4年生まれで91歳になる今も意欲的に執筆を続ける泉さん。楠木正成や高向玄理といった地元の素材を元に歴史小説を出版し、次作では大江時親の物語を出版社に売り込んでいる最中です。

●終戦後は法律を教える身に

泉さん（本名溝側功一さん）は昭和4年に大阪市内で生まれ、中学2年生のころ家族とともに河内長野に疎開しました。当時は田んぼが広がるのどかな農村だったそうです。

その後、学徒動員を経て、終戦後に哲学者サルトルの「実存主義とはなにか」を読み感銘を受けます。「人間は目的無く生まれてくるが、人生に意味を持たせることができ、希望を持ち生きよう」という考えは、終戦後の大変な時期に生きていた泉さんにとっての希望の光となり、実存主義の思想のもと、小説家を目指し執筆をはじめます。

しかし、時代の荒波から小説家として生計を立てることができず、恩師からの勧めで働きながら大学で法律を学び

ました。

大学卒業後、大阪地方裁判所に書記として就職するも、病気を患い裁判所を退職。法律の知識を活かし専門学校で40年近く教鞭をとりました。

◀教鞭をとっていたころの泉さん



●仲間とNPO法人を設立

泉さんは講師をすらかたわら、法曹知識を活かして行政書士にも挑戦。仲間同士で法律の勉強会を開催していましたが、その経験や人脈が地域の役に立てばと考え、仲間を集めてNPO法人研究会を立ち上げ、ボランティアで相談会を開催するようになりました。今では弁護士や税理士、行政書士など22名が集まる組織に成長しました。

●書きためた小説を出版

芥川龍之介や菊池寛に憧れ、仕事の合間をぬって小説を書きためていた泉さん。70歳で一念発起し、様々な文学賞に応募。

「羅刹に見放された男」という作品の、人の欲望をえぐるような点が評価され出版社から声がかかり、平成17年には念願の書籍化を実現しました。

2作目は、裁判所での経験などから医療と相続の問題を扱った医師の物語など現代的なテーマを掘り下げ、その後、地域の歴史上の人物に目を向けるようになりました。

●健康法は木刀での素振り

執筆活動やNPO活動など、年を重ねて益々壮々なる泉さん。病気を患ったことや、戦後すぐアレルギー体質で気管支喘息になったことから、健康には人一倍気を使っています。医師に勧められ、木刀での素振りを40年以上続け、現在では90歳を越えているとは思えないほどに精力的に活動しています。大江時親の物語を書籍化するという夢を実現するため、出版社を探す毎日です。



執筆するために素振りでの体力作り